

バーン＝ジョーンズ：装飾デザインとレッド・ハウス

デザイン学科

白石和也

Burne-Jones: His Decorating Designs and Red House
by Kazuya SHIRAISHI

バーン＝ジョーンズが装飾芸術と取り組んだ理由は二つある。一つは彼が生計を立てる必要であった。彼の絵画が特によく売れていた1880年代の頃を除けば、このことは常に重要であった。もう一つは美術と装飾芸術の境界を乗り越えて仕事する進取な芸術家のやり方であった。友人のウィリアム・モリスは建築家から画家になろうとして両方ともうまく行かず、自分に正直な仕事を見つけるのに数年はかかったが、バーン＝ジョーンズは発端から画家になる決意をした。そうして芸術が日常的なことを豊かにする黄金時代として中世に目を向けていたゴシック復興の建築家やラファエル前派の画家の姿勢に自分を見出したのである。彼らは美術と装飾の相違が明確化されたのがルネサンス期であって、そうした区分は陳腐で格式ばっているように思えて美術と同じ熱心さで家具や天井装飾を計画することに移行していったのである。バーン＝ジョーンズはこの彼らの熱中の裾分けにあずかり、初期の経歴から彩色家具やステンドグラス、刺繍、タイル画、書物の挿絵などに取りかかった。従って彼の装飾芸術家としての経歴の始まりに関しては媒体やテクニクの独自の説明を要するであろう。

ジョージアナはマドックス・ブラウン夫人に丁度良い時期の1860年4月に招待されたので、彼女はロンドンのフォーテス・テラスへ行って、バーン＝ジョーンズと常に会える一ヶ月を過ごし、楽しさを新にした。その滞在が終る前にブラウン夫妻にバーン＝ジョーンズが結婚に踏み切った方がよいという助言をしてもらい、マドックス・ブラ

ウンの相談役の評価が高かったので、その提案にエドワード・バーン＝ジョーンズもジョージアナも反対する話し合いもなく、急に結婚することが決ったのであった。ジョージアナは直に母親に手紙を書いたが、両親はバーン＝ジョーンズに何も質問することなく承諾をした。ロセッティはシダル嬢の病気のために呼び戻されて、バーン＝ジョーンズはあまり彼に会っていなかったが、二人の友情は変りがなかった。ロセッティも自分たちと同じ時期に結婚すると聞いて、バーン＝ジョーンズたちも興味深く思った。その後できるだけ早々にロセッティとバーン＝ジョーンズの二組がパリで落ち合う計画をたてた。ジョージアナは結婚の準備をしにマンチェスターに帰って、結婚式の日取りを二人の婚約の四周年記念日の1860年6月9日に決定した。

バーン＝ジョーンズは落ち着いた結婚の一週間前に彼が所有していた素地仕上の檜材の食器棚に図像を描いて楽しみ、この新しい状態に気づいて嬉しい驚きを感じた。彼が初期に装飾を施して現存する主要な彩色家具は以下のようなものである。ウィリアム・モリス夫妻の結婚祝いに贈るためにフィリップ・ウェップに設計してもらい、バーン＝ジョーンズが装飾した衣裳筆筒の装飾の絵（現在はオックスフォードのアシュモリアン美術館所蔵）があるが、その絵は喉を切ったしばらく後も聖母マリアを讃えて長く歌い続けたセント・ヒューの話であり、これらのバーン＝ジョーンズの初期の作品の形象にはむしろ奇妙で、気味の悪いものがある。バーン＝ジョーンズが所有してい

た食器棚の「乙女たちと動物たち」の絵は全部で7場面あったが、それらの絵は互いに多様な関連を示すものであった。三人の優しくよく気がつく乙女は豚と鸚鵡と魚に餌をやっているところ、残酷な二人は梟を無理やりに三面鏡に映しだし、もう一人は金魚を網ですくって干し上げていじめている場面、それから後の二場面は庭の小道でぞっとするような井守イモリの恐怖に晒され、怒った蜂に襲われる場面を描いて扉をあがなうものであった。

マドックス・ブラウン氏は1860年のジョージの結婚祝いにカサウッド夫人と共に家を訪れて称賛したことがある、あまり目立たないバーナーズ・ストリート司祭製作の小型のピアノを贈ってくれた。それはアメリカン・ウォルナツの見事な素地仕上げの気持良い色のピアノであったが、バーン＝ジョーンズはそれにも絵を描くことにした(図1)。その小型の楽器の蓋を開けた内側には、彼の最も初期の「恋の歌(Chant d'Amour)」の図柄が描かれたことは明らかであるが、鍵盤の下のパネルには金箔とラッカーで死の図像が描かれた。この贈り物の堅型ピアノの正面にバーン＝ジョーンズは例えば、座って楽器を演奏したり、恐らくは眠っている女性たちを下のパダルペダルのところに描いたが、その絵の門のところに死神がいる

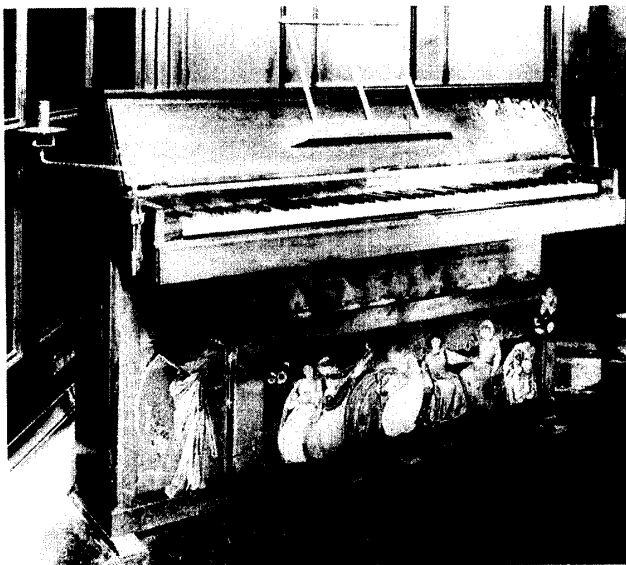


図1 エドワード・バーン＝ジョーンズが装飾した堅型ピアノ。1860年。

のに誰も気付いていない様子である(図2)。つまり数人の少女たちが寝そべったり音楽を聴いている楽園の門の外に、ヴェールと王冠を着けた死神が立っている。このラッカーで描くのは、液体状のラッカーにバーン＝ジョーンズは赤く焼けた火かき棒を用いて色彩を深めねばならなかったのだととてもスリルな過程であったという。そのデザインは14世紀のピサの共同墓地の死の勝利にある恋人たちの描写を反映するものであったようだが、バーン＝ジョーンズの眠りや音楽、死の形象は日常生活の家具がもっと奇妙な考えや感情に関連すると思っ表わしたものである。この頃に彼は技法の習熟だけでなく、独自のスタイルを發展させた水彩画も描いている。「至福の乙女」という作品は1875年にプリント氏が制作依頼したもののだが、1860年になって彼は仕上げた(図3)。その絵を見るとロセッティの流儀からすでに出ていることが分かる。主題や発想が確かにまだ中世的であるとラスキンが嘆いて指摘した中世の古風で奇異なところはあまり無くなっている。特に人物像は優雅で洗練されていた。

新婚生活の門出にあたっては、プリント氏が依頼した作品を仕上げる外はバーン＝ジョーンズに何も責務はなく、手元には30ポンドが準備され、ジョージアナが木口木版をする道具を入れていた引出し付きの縦材のテーブルを持って行った。結婚式の三日前にプリント氏が「二枚のペン画のための代金を今日支払います。今すぐに必要と思われる25ポンドの証書を同封します」という走り書きと一緒に証書を送ってくれたので、かなり豊かになった。6月9日は土曜であったので、二人はチェスターより遠くへは行かないことに決め、その珍しい街路を見たり、日曜の大聖堂の礼拝に参加することにした。

この頃ゲイブリエル夫妻はパリであったが、バーン＝ジョーンズたちは二、三日後にパリで落ち合うつもりであった。しかし不運にも、バーン＝ジョーンズが前日かその前日に土砂降り雨で濡れて扁桃腺炎を起こしてしまっ、日曜の午後に悪化して声がほとんど出ずに見知らぬお医者にかか



図2 堅型ピアノにバーン＝ジョーンズが描いた絵の細部。1860年。木材に金ジェツツを塗り、金の部分はシェラック層で覆ってある。33×125.7cm。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館，ロンドン。

ってまったく知らない土地の陰鬱なホテルで数日は過ごすことになった。パリは諦めねばならないことは明らかで、バーン＝ジョーンズの旅行の許しがお医者から出たらすぐにも、家に戻ることであった。残念なことだがジョージアナはゲイブリエルに彼らの現状を伝える手紙を書いたところ、意外にもゲイブリエルたちも「歩き回る」ことに疲れたので、できるだけ速くロンドンに戻って、友だちと一緒にいるのを楽しみにしているという返事があった。

バーン＝ジョーンズ夫妻が帰ってきたのが、取り決め通りでなかったのが、ラッセル・プレイスは二人を迎える準備がまだできていなかった。居間には椅子もないし、テーブルの外は注文した家具がまったく届いていなかった。それでもどうということはない。椅子がなくても檜材でできた堅牢なテーブルはあったし、新妻はそれで訪問者たちを歓迎した。それにアトリエは以前のままの状態であったので、つましい家庭生活ならすぐにできた。ユーストン・ロードの少年院の少年たちがフィリップ・ウェップのデザインを手本にしてあわただしく作った椅子やソファなどがほどなく届けられた。それらの椅子は座部がラッシュの黒いハイバック・チェアと板部を黒塗りにしたソファであった。

ロセッティ夫妻はパリからロンドンへ戻って来てからハムステッドに借り住まいした。その始めの頃は彼女の病気が良くなく、バーン＝ジョーン

ズたちはほとんど会えなかったが7月末になってやっと延びのびになっていた会合の楽しい日が決まって、ゲイブリエルは動物園の「ふくろ熊の穴」のところを会う場所を選定してマドックス・ブラウンとバーン＝ジョーンズ夫妻に知らせた。その会合の思い出をジョージアナはこのように書き残している。「梟のところを通り過ぎるときに、梟が互に一斉に飛び出して、ゲイブリエルが梟の檻の棒の間でステッキをがたがたさせたので、梟が怒って大きな声で鳴きだした。そのさいのリジー（ロセッティの妻）は〈ぴったり仕立〉の姿とは反対だが、優雅で簡素なデザインの服を着ていた—その時は背高に見えたが、実際にどれくらいであったかは分からない—痩せて優雅な彼女が私のところに寄って来た」⁽¹⁾。

モリス夫妻の新居であるレッド・ハウス（赤い家）は1859年5月に着工されたが所有者に引渡し準備ができたのは1860年の夏の終わり頃であった。それはバーン＝ジョーンズの言葉でいえば「地上で一番美しい所」、いわばモリスの私的な地上楽園になるつもりで、モリスはそれを「芸術の宮殿」と言った。あらゆる彼の仲間たちが豪華な装飾をする目的ではせ参じた。その経験からモリス、マーシャル、フォークナー商會が生まれたといってもよい。その少し後にバーン＝ジョーンズは休暇や友だち付き合いのためでなく、装飾の打ち合わせの目的でレッド・ハウスへ行ったのだが、バーン＝ジョーンズ夫妻はこのモリス家のアパート

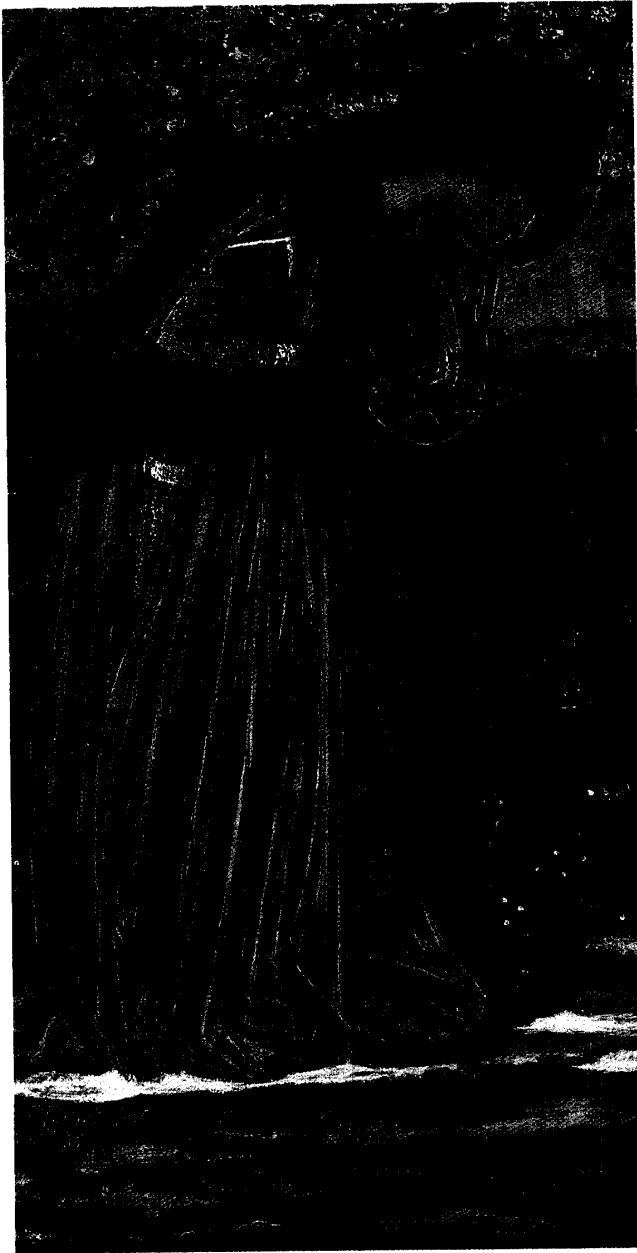


図3 「至福の乙女」1860年。グワッシュ。40×20.3cm。アメリカのマサチューセッツ州、ケンブリッジ、フォッグ美術館。
最初はディプティック（二連画）として構想したが、完成されたのは一枚だけであった。仕上がらなかった別のは、地上にいる恋人を描く予定だった。彼のこの意図を1875-78年にロセッティが同じ主題の絵によって具現化している。このパーン＝ジョーンズの絵はT. E. プリントが1857年に制作依頼したもので、「至福の乙女、天国の黄金の棧より／身を乗り出した／その瞳は海の深みよりさらに深い」というロセッティの詩作を絵にする注文であった。

ンの新居に夏から10月まで一緒に住むことになった。「あの頃はまだ田舎で、乗降場を降りて行くと、かぐわしい香に満ちた新鮮な空気が私たちを迎え、外に出るとレッド・ハウスから寄越された軽四輪馬車が出迎えてくれた。それから丘をあえぎながら昇り、高台の曲がりくねった道を揺られながら3マイル進めて左手に〈ホッグズ・ホール（豚の穴）〉を過ぎ、ほどなくして私たちは友の家の門に到着した。私たちが町を通ってくるようにモリスが言いつけたらしく、背の高い女の人が一人、ポーチで私たちを出迎えているのが見えた」⁽²⁾。

その軽四輪馬車はメイ（モリスの長女）の話によると、ウェップがデザインし、ベックスリーで組み立てられた。旧式の市場の運搬者のようにアメリカ製の幌で覆われ、チンツの掛布で裏打ちされていた。そして車体の後にはモリス家の紋章が描かれていた…これができ上がると、よく友人たちと遠乗りに出かけたが、そのさいに近辺の人々は大いに喜んだという。つまりは旅のサーカス団の尖兵隊と間違えられたのであった。

レッド・ハウスは急勾配の赤い瓦屋根と奥まったゴシック様式のポーチがあるL字型をした二階建てに設計された。窓も引込んでいて上に煉瓦の尖塔アーチがついた変則的な屋根の線と円錐形の屋根のついた煉瓦と木材でできた井戸付きの中庭がこの中世風の趣を与えるのに一役買っている。モリスは中世風の庭も設計した。それは家の正面で正方形のきちんと四区切りになった庭で、それらが合さって大きな正方形に一体化されるようなデザインであった。各々の小さな正方形の回りには編み枝で作った垣根が巡らされ、その一部が出入りできるような開口部が作ってあり、垣根には薔薇が一面にぎっしりと生えていた。馬二頭分の厩舎をもつ小屋が庭の隅にあって、端が道路に面しており、その母屋の弟分のように見えた。マッケイルはこの庭について「芝生の長い遊歩道があり、夏至の頃には百合が咲き、秋には日向葵が咲き、色とりどりの花が咲きこぼれる正方形の花園の回りを薔薇の生け垣が囲んでいた」と書き

ている⁽³⁾。長い塀は家と庭を道路（レッド・ハウス・レーン）から仕切って、大きな赤い木戸が曲がりくねった短い私設車道に通じていた。エイマー・ヴァランスはレッド・ハウスを訪れて、高い天井、むきだしの梁、煉瓦のアーチ、単純率直な煉瓦の暖炉といった特徴のある室内について「ひどく簡素で堂々としている」という印象であったと書いた⁽⁴⁾。さらに彼は

レッド・ハウスはあまり大きな家ではなかったが、あらゆる理にかなった要求に応えるように、デザインに目的や比例関係が巧みに取り込まれていて、意外に広い感じを与えた。北向きだがわずかに西にも偏って建っており、建物の一番長い南西面が陽のあたる正面になっており、その窓下は仕事が終わってよくした芝生ボウリングのレーンになっていた。その家が林檎園のなかに建てられていたので、庭がすでに美しかっただけでなく、外壁にはできるだけ早くから花をつける蔓植物が植えられていたので、完成したさいには建てられたばかりの生々しさがなく、その時にすでに格好がついていた。その室内装飾については以下のような当時の様子が述べられている。

その堂々とした特徴は広間を見ても一目瞭然で、深紅色のタイルもしくは敷石が張られた床、先が小尖塔状の親柱、どっしりした檜材の階段、それを見上げると、むきだしの大胆な模様が描かれた天井が目に入る。当初の計画では、階段室の壁一面にトロイア物語を題材にしたテンペラ画を何点か描き、その下に英雄たちで一杯の大きな軍艦を描く予定であった。ポーチから入って右側の壁には、ウェップのデザインによるどっしりした長椅子付き食器棚が置かれ、これには「ニーベルンゲンの歌」から取材した場面が描かれていた。それはロセッティだとも、バーン＝ジョーンズの作だとも言われているが、恐らくモリスの作と思われるこの絵は未完のままであった。左側には裏のポーチに通じる長い廊下があり、その片側に並んでいる複数の高い窓には彩色ガラスがはめられている。そこに描かれたのはバーン＝ジョーンズの二枚の小さな人物画と、ウェップとモリスの手にな

るクウォーリ（小さなガラス・パネル）には動物と鳥が面白可笑しく描いてある。広間の右は食堂で、そこにはゴシック風の馬鹿でかい赤い食器戸棚がある。精巧さの点では劣るが、この食器戸棚は、この頃にウィリアム・バーجزがデザインしていた類の家具を思い出させるものである。ウェップとモリスが盛期ヴィクトリア朝の伝統とどれほど一体化されるかがその点でわかる。

二階の主要な部屋はアトリエと客間に使われ、これらの部屋の天井は、斬新にも、ピュージンの設計したパーミンガムの主教公邸のように、屋根の高さまで引き上げられていた。モリスはこの客間をイギリスで最も美しい部屋にして見せると言った。この部屋はL字型の出隅を占めており、広々とした土地が見渡せる大きな高い窓は、これも斬新に北向きになっている。従ってここはすこぶる寒い部屋になった。この部屋の南側と東側は廊下になっているといった奇妙な間取りになったのは、どうもこの建築工事が例年にない猛暑の夏に行なわれたということ、それにモリスが暑いのが大嫌いであったことが原因のようである。もう一つはこの客間にフレスコ画や刺繍作品を備える必要もあったからであった。他にこの客間は、西向き小さな出窓から夕日の柔らかな日光を入れて明るくすることができる利点があった。

この部屋の装飾には数年かかったが、結局は完成にいたらなかった。天井はモリスとジェインの手で花模様が描かれた。バーン＝ジョーンズは壁面にロマン（物語）作品の『デグレヴァント卿』に取材した情景を描き始めた。その詩作の7場面の下絵を描いて、その3場面の夏と秋をテンペラ画にした。モリスはその下に樹木と鸚鵡のフリーズ（帯状装飾）をほどこし、その隙間に〈If I can（力の限り）〉という人生のモットーを書いた。

モリスはこの部屋の装飾の仕事を懸命にしたのでとても美しくなった。そこへロセッティが訪れて、まだ空白になっている多くの隙間があったので、その一つにモリスのモットーをパロディにして〈As I can't（私にはできないから）〉と書いた。

リジー・シダルも室内装飾の作業に参加し、ロセッティはレッド・ライオン・スクウェアから移してきた巨大なセトル（戸棚付き長椅子）の戸に「ベアトリーチェの挨拶」を描いたが、これは今でも客間の一角を占めている⁽⁵⁾。

フィリップ・ウェップはそのセトルに手すりを付けて、ミントレルズ・ギャラリー（余興用の露台）に使えるようにしたが、そこでは大方は浮かれ騒ぎが行われた。レッド・ライオン・スクウェアから遠くないハットン・ガーデンのクリストファー・ストリートに当時あったトミー・ベーカーという家具メーカーで働いていた大工のヘンリー・プライスはモリスの主要品目であるキャビネット（収納筆筒）を注文しに来たさいの日記を残している。彼が指摘したような特色はすべて失われているので、ウェップがそのセトルの大方をまったくデザインし直したと考えてもよいであろう。その戸棚の現在の蝶番は最初の5つのもくネジの列でなく、7つの列で固定されているのがうかがえるのである。そのセトルの両側にバーン＝ジョーンズが壁画として大好きなアーサー王物語に取材した「デグレヴァント卿」を描いたものを用いたのが今も元の場所に残っている。その右の方の物語の最後の挿話は婚礼宴のデグレヴァント卿と花嫁になぞらえてモリスとジェイニーが描かれた⁽⁶⁾。

モリスがイギリスで最も美しい部屋にしようと大胆に着手した客間も長年にわたって大いに変えられた。バーン＝ジョーンズの壁画は残っているが、それらの下の装飾はない。ジョージアナによるとモリス自身がデグレヴァントの絵の下の低木と鸚鵡の掛け物に「If I can（力の限り）」と書いたのは、何でもできることで有名になった人物の一風異なった表現をモットーにしたと報告している⁽⁷⁾。多分モリスは自分の刺繍の進み方にいらついで、刺繍でなくテンペラで書いて速くデザインを仕上げようと決めたのであろう。彼のこのモットーをフランス語で「Si je Puis」スイ・ジュ・ピューイ＝力の限り」と手書きしたタイルもレッドハウスの二階の広間の魅惑的な明り取り窓のステ

ンドグラスの菱形に残っている。それは彼がひいきの芸術家ヤン・ヴァン・エイクの1433年のある男の肖像画が自画像と見なされ、その額縁の上部に「als ixh xan」と書いたが、実はそれが「ich/ixh（モットーとエイクの名前の語呂合わせ）」であることに注目すると興味がそそられる⁽⁸⁾。その絵をロンドンのナショナル・ギャラリーが1851年に取得しているので、多分モリスはそれを見たのであろう。

モリスたちが特別に制作する必要がなく、客間のために購入したのはペルシア製の敷物と青磁器とデルフト焼だけのようであった。週末に家の室内の装飾が終わると、庭ではボウリング、客間では若者たちが熊さながらの取っ組み合いなどをして底抜けの大騒ぎになった。ある時は男たちがその取っ組み合いをしながらセトルの階段を上りミントレルの露台で揉み合いになり、絵の手伝いに来ていたチャールズ・フォークナーが突然に手すりを跳び越え、どしんというものすごい音をたてて床の真中に降りてきたりした。別の時に彼は風で落ちてきた林檎をこの露台に貯め込んで、近寄ってくる者にこれを投げて防戦したものであった。ある時などはその林檎がモリスに見事に命中し、目の回りに黒あざができてしまったこともあった。こうしてレッド・ハウスはバーン＝ジョーンズ夫妻、マドックス・ブラウン、アーサー・ヒューズと彼らの妻たちやフォークナーと彼の姉妹たち、ウェップやスウィンバーンたちの楽しい集会場になった。地下室にワインがたっぷり貯蔵されていたこともあり、装飾の進行が中断されることもあったり、絶えず悪戯があり、扉の上から本が落ちてきたり、食べるものがなくなったと言ひ含められ、怒りが爆発した直後に大笑いになったりした。ディナーの席でよく主人のモリスをのけ者にして、皆が一言も口をきくまいとしたが、ついに一同がこらえきれずに笑い出してしまうことも多かった。暗くなると、家中を使って隠れんぼしたり、ピアノを囲んでイギリスの昔の歌を歌ったりした。ジェイニーが鬼になったある時など、バーン＝ジョーンズが戸を開けっ放しで、灯りの

ない真っ暗な部屋へするっと入り込んで姿を闇に消してかなり経ったので、彼が入っていったに違いないと思える部屋に彼女が怖々とゆっくり近づいて行ったら、突然に彼が隠れていた闇から出て来たので、背高で色白い彼女の美しい姿が吃驚して大声を出し、その後は大笑いになった。また来訪者たちはモリスが太るのを気にしていたのに乗じて、夜の内に彼のチョッキに上げをしてしまったが、モリスは翌朝に「また君たちがやったな」とむしろ上機嫌で言ったものである。またある時のディナーの前にモリスが地階の貯蔵室に行くと、沢山のワインを両手に持ち、他のものを両脇に抱え込み、満面に微笑みを浮かべて戻ってくる光景もあったが、地下室のワインがある日姿を消したとって吃驚させた。このような学生がやるようなあらゆる類いの陽気な馬鹿騒ぎは、オックスフォード時代から相変らず続けられたようである。ジョージアナは何と幸福であったことか、と思いつけている。

女性たちの午前中は針仕事や木彫などで忙しく、午後にはケント州の一枚の地図をたよりに馬車でこの地方を探勝して回ったりもした。ある日はクレイズに、別の日にはチズルハースト・コモンに行った。どこに出かけても何かの新しい楽しみが得られ、家に戻っては残って仕事をした男たちへ冒険のみやげ話をしたりした。頻繁ではないが、男たちも一緒に出かけることが何度もあった。バーン＝ジョーンズはこの遠出を好きでなかったようで「私は林檎を見るだけで沢山だートプシーの庭の林檎の木に沢山実っているじゃないか」と言った⁹⁾。彼には郊外の秋の悲しさから身を守ろうとする観念があったようである。

デヴォン・グレイト・コンソル社からモリスが得ていた収入が急速に減りはじめたのでモリスはその家の室内装飾に要するすべてを扱う工房を作ろう、と思いついた。すでにウェッジはレッド・ハウスのために、美しい食卓用のガラス器—これらはホワイトフライアーズのパウエル商会が製作したが—金属製の燭台やテーブルもデザインした。バーン＝ジョーンズも教会用のステンドグラ

スの下絵を何枚かすでに描いていた。それで自分たちも経験を一つにまとめて、社会に役立つことをしてみようという考えが出てきたのであった。バーン＝ジョーンズは暖炉用の絵入りタイルも何点かつくっていた。会社を作ろうという発端についてロセッティはこのように言っている。

「ある晩、大人数人が集っていたが、話が昔の芸術家の流儀のことになってね、昔の芸術家というのは何でもやった、室内装飾はどんなものでも彼らがデザインしたし、家具のデザインだって大抵は彼らが担当した、というわけだ。すると誰かが、冗談に5ポンドづつ出し合って、自分たちの会社を作ろうじゃないか、と言った。当時では5ポンドのお礼なんて高嶺の花であって…会社は結成されたが、証文だとか何だとかいうものはなかった。実際それはお店やさんごっこに近かった。モリスが経営者に選ばれたのも、彼だけが暇とお金があったからに過ぎなかった。商業的に成功するなんて考えもしなかったが、それがうまく行ったのだよ」¹⁰⁾。

モリスにとって「この会社は友人であり、芸術家でもある人々が協力し合って仕事を進めるといって、明確な合意以上の意味は多分なかった」。しかしもっと現実的な面については「会社の財政は一株一ポンドのコール（払込請求）をもって始まった。これとレイトンに住むモリスの母親からの無担保で借りた100ポンドを元手に、初年度の商いが行なわれた」とマッケイルは述べている¹¹⁾。

コーメル・プライスもこの夏にロンドンに来て、バーン＝ジョーンズの反対側に下宿して絶えず会えるということになり、バーン＝ジョーンズも彼が医療課程の授業を修了してしまうまで近くにいたいと望んでいたが、アプトンから帰ってみると、驚いたことにこの見通しはバーン＝ジョーンズが知らないうちに変更されていて、プライスは当座の収入を得るためにロシアに個人指導の仕事を受け入れて行ってしまっていたのである。その契約が満足であれば、彼は7年間も続けるということであった。

バーン＝ジョーンズは10月にレッド・ハウスを去る前に、三点の絵を仕上げていたが、壁が新しくやはり絵画の下塗りが十分でなかったため、不運にも学生会館の場合と同じように間もなくして色彩が所々褪せてしまった。しかし彼の作品は彼の人生と織り混ざっているもので、同じ主題の「デグレヴァント卿」の物語の絵が37年後にケルムスコット・プレスのためにも制作されることになる。「何回も同一主題を繰り返すのは、自分自身の感じる想像がいつもそれだからで、時間が経てば少しはましになるだけ」だと彼は述べたこともある。この頃にバーン＝ジョーンズは父親に「家に帰って後2か月間はいるつもりです。できるなら、腰を落ち着けて仕事をしたいのです。頼んでおいた額縁は何時できるのでしょうか。絵の一部の素描2点を売ってもらいます。額縁に入ると異なって見えるので、それなしで見せたくないのです」⁽¹²⁾。この素描というのは、彼がアプトンに行く前の水彩画の小品で「シドニア・フォン・ボルク」と「クララ・フォン・ボルク」の絵のことであったようだが、彼の父親も息子の絵を額縁に入れるのは非常に嬉しかった。しかしオリジナルな作品をまさに売らねばならなかったため、彼の父の小さな店の技術では手に追えなかった。バーン＝ジョーンズはそのとりきめを次第に穏やかになくしていったが、ジョーンズ氏自身の作った鏡は残った。

ラファエル前派の絵画ではたとえ異をしかける魔女とか魔法使いなどの女性像でも宮廷の貴婦人のように理想化されて美しく表わされた。バーン＝ジョーンズも手段がいかにか背德的でも美貌によって男を虜にする女性を責めるべきでないと主張した。シドニア・フォン・ボルクはウィルヘルム・マインホルト作のゴシックの物語による魔女で、誰でも魔力の虜にし、ポメラニアの宮廷と支配層を全員殺して破壊する悪の権下であった。しかしバーン＝ジョーンズは誘惑、悪、魔力の三つの観念が結合しているところに魅惑され、いわゆる「宿命の女 (fatal femme)」という考えに基盤を与え、こうしたファンタジーを生涯好むことに



図4 「シドニア・フォン・ボルク」1860年。水彩。33×17cm。W. グラハム・ロバートソンが1948年に遺贈して以来、テート・ギャラリー、ロンドン。

なる。絵画のなかのシドニアは従って誇り高い美人であり、金細工のヘアーネットを被った髪は黄金色が花のように蜜蜂を引寄せ、ゆったりした外衣が何となく彼女の奸計を暗示するような複雑怪奇な蜘蛛の巣模様で覆われている(図4)。そのモデルは美しい顔だちだが多情な性格をはからずも見せたファニー・コンコースと言われている。それと対になる作品が「クララ・フォン・ボ



図5 「クララ・フォン・ポルク」1860年。水彩。34×18cm。W. グラハム・ロバートソンが1948年に遺贈して以来、テート・ギャラリー、ロンドン。

ルク」で、彼女はシドニアに殺されるのだが、この絵のクララは鳩の巣を大事に抱えている「小鳩と賢母」として表わされ、モデルはバーン＝ジョーンズの貞淑な妻のジョージといわれ、この絵は運命とは異なる女性の美質を表わしたものと考えられる（図5）。

ラッセル・プレイスでの6か月ばかりの家事の経験はジョージアナにあまり役立つものはなかつ

たが、バーン＝ジョーンズがそこでの最初の会計簿の裏表紙に二、三の線画を描いているところによると、彼女は家政の外に音楽も練習したという印象を与える。それに彼女はただ一人の美しく気立ての良い女中に頼んでモデルになってもらって素描もやってみたようである。ロセッティ夫人のリジーも時々やって来て、お伽噺の挿絵を何枚か一緒に描いてみたりもした。主人たちに何とか付いていきたいという望みからであったが、ものにはならなかった。ゲイブリエルはかつてリジーが病気がちであったのを恐れて、ロンドンに連れてきて住むのをハムステッドかハイゲイトあたりに適当な場所を探して移ろうとしたが、適当な住いが見つからなかった。彼女が結婚して健康も少しは回復したように思えたので、ブラックフライアで冬を過す経験をさせることに決めた。チャタム・プレイスの家主はロセッティがすでに借りていた家に加え、隣の家の二階を提供し、二つ棟のコミュニケーションを密にすることでかなり良い部屋がとれた。バーン＝ジョーンズたちは時々そこへ行くと、男性二人がアトリエで過すことが多く、リジーとジョージアナが親しくなった。リジーはあまり楽しそうに話さなかったが、ゲイブリエルは部屋に入ってくると彼女の神経にさわるようなことを正すようにしたので、様子がまったく違って落ち着くようであった。バーン＝ジョーンズ夫妻はクリスマスにそれぞれの実家に戻るよう約束していたので、二人はマンチェスターとバーミンガムにそれぞれ行って、年の暮れにはジョージアナがバーミンガムの彼の父親の家で合流することになった。

モリス・マーシャル・フォークナー商会は、4月11日に創立され、趣意書が作成された。設立参加者たちは自分たちを「絵画・彫刻・家具・金属細工における美術職人集団」と規定した。趣意書の冒頭にはこのような名前が記された。フォード・マドックス・ブラウン、エドワード・バーン＝ジョーンズ、C. J. フォークナー、アーサー・ヒューズ、P. P. マーシャル、ウィリアム・モリス、D. J. ロセッティ、フィリップ・ウェッ

ブである。マーシャルはブラウンの友人の測量技師、及び衛生工学技師であった。アーサー・ヒューズの名があるが、彼がこの会社の一員であったことは一度もなかった。モリスは経営者として年収150ポンドを受け取り、フォークナーも簿記係として同額を受け取ることが決められた。その趣意書には、

「…上記連名の芸術家たちは協労によって…芸術家の監督と、それに加えて…本質的に最大量の芸術家の仕事が、最小の費用で得られることでしょう。同時に、仕事の仕上げは、通常行なわれているような、誰か単独の芸術家が行きあたりばつたり雇われるような仕方よりも、必ずやはるかに完成度の高いものとなるに違いありません。

これらの芸術家は多年、あらゆる時代、あらゆる国の装飾芸術の研究に深く関わってきましたので、本物の美しい作品が手に入れられるか、あるいは作らせることができる場所がないということ、を、一般の人々以上に痛感しておりました。それゆえに彼らは対象の品々を、彼ら自身の手で、彼らの監督のもとにどのようにして生産するかを目的として、みずから一商会を設立する運びとなりました」という考えが書かれ、

- 1 壁面-住宅、教会、公共建築に用いる絵画、模様、あるいは色の配合のみによる装飾。
- 2 建築に用いる彫刻一般。
- 3 ステンドグラス。特に壁面装飾との調和に関わるもの。
- 4 金工。宝石装飾を含むすべての種類のもの。
- 5 家具。その美が、家具そのもののデザインによるか、従来看過されていた材料の適用によるか、あるいは人物画や模様との結合によって生み出されるもの。この部門には、あらゆる種類の刺繍、押型皮細工、および一切の家庭用品を含む。

さらに申し上げておくべきことは、これらの部門の仕事はすべて、見積りも施工もビジネライク

に行なうことだけです。そして、良き装飾に必要なのは、費用の贅沢ではなく、審美性の贅沢でありますから、それは一般に考えられているよりもはるかに廉価で得られるものと私どもは確信しております」⁽¹³⁾ という仕事の内容と取り引きのことが明記されていた。

商会はモリスとバーン＝ジョーンズの昔の下宿から目と鼻の先にあるレッド・ライオン・スクウェア8番地（ブルームズベリー地区）にある建物の二階を事務所兼ショールームに、四階および地階の一部を工房にしたが、ガラスとタイルを作るための小さな窯を地階にしつらえた。仕事が盛んになると、12名ほどの成人男性と少年たちを、そしてこれらの少年たちはユーストンの孤児院から、大人は主としてカムデン・タウンから雇った。その職長となったジョージ・キャンプフィールドはガラス絵師で、モリスとがキリスト教社会主義者のグレイト・オーモンド街にあるF. D. モーリスの労働者大学で知り合った人物である。商会の定例会議は水曜の夕方にもたれたが、これを例外にすれば、メンバーのなかで通勤していたのはモリスとフォークナーだけであった。

バーン＝ジョーンズがこの頃に描いたなかでジョージアナが彼の性格をよく思い出させる絵として挙げているのは、それぞれの中央が「三賢人の礼賛」で両翼に天使と聖母を描いてあった油絵の二つの大きなトリプティック（三枚続きの祭壇装飾）であった。これらの翼面の人物像はいずれも同じだが、中央の主題の処理の仕方は異なっていた。この絵は最初ブライトンのセント・ポール教会の祭壇画のために依頼されたのだが、バーン＝ジョーンズが最初の下絵を描いたさいに、中央のパネルの構図が詳細過ぎて遠くから見るとその話の内容が分からなくなることに気付いてその大きさが不満であったので、もう一度描き直した。この絵を描いている最中にプリント氏の逝去が知らされ、彼の遺産のできるだけ早い認知が重要であることが分かり、バーン＝ジョーンズは友人たちに相談した結果、彼がなすべき遥かに重要なことと判断して、プリント氏の前金の見返として最初

の方の絵をその遺言執行人たちに渡し、教会のためには別のもっと簡素な下絵を描くことにした。その別の絵では賢人たちが膝まづくのではなく、立っていて互いの間隔をもっとゆったりと明瞭にし、全体を金の背景で描くことを彼は提案した。その段取が関係するすべての人たちに賛同され、このトリプティックはそれ以来、セント・ポール教会に置かれることになった。そのいずれの絵にも三賢人の一人としてモリスが、スウィンバーン

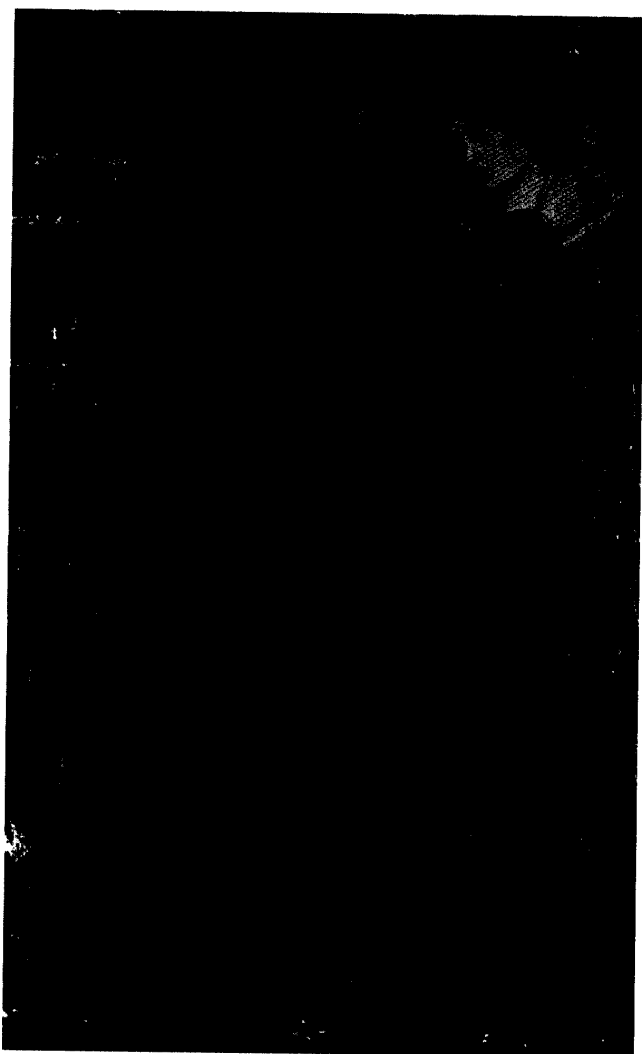


図6 「クラーク・サンダーズ」1861年。グワッシュ。69.9×41.9cm。テート・ギャラリー，ロンドン。スウィンバーンは1858年からスコットランド・イングランド国境地方のパラッドの何篇かを翻案することにしていたので、彼とバーン＝ジョーンズがこの主題について論じていたと考えられる。

とバーン＝ジョーンズは羊飼いのモデルになって描かれた。この作品は友人のG. F. ボドリー氏が、衝立ではなく祭壇の背後の飾り壁に描いて装飾すべきだと助言し、彼に任された結果、バーン＝ジョーンズをその芸術家として起用するように教会に提案したのであった。その10年後にふとした機会にボドリー氏がロンドンのある所に「古いヴェネツィア派の絵」があると聞いたので、見に行つてその名称で知られた二枚のトリプティックの最初のを購入したが、それがプリント氏の遺産の売り立てにいらぬ情報が分からなかったバーン＝ジョーンズの絵であった。それを最初に買った人はイタリアの絵かどうかも分からずに買ったという。ボドリー氏は「私にとって、それを見に行つたのが奇妙でもあり、嬉しいことでもあった」と付け加えている⁽¹⁴⁾。

バーン＝ジョーンズは1861年にボーダー・バラッドへの熱烈なる共感をうまく表した「クラーク・サンダーズ」という水彩画も描いた(図6)。スコットランド生れの太柄のマーシャル氏はその詩の伝統的な旋律でジョージアナたちを喜ばせ、楽譜の手稿本やその他の二、三の貴重なものを造っておこうということになった。ロセッティがよく所望したのは「三羽のワタリガラス」であった。それから「ヴィーナス礼賛」という小品の水彩画も描いたが、これはバーン＝ジョーンズのとりわけ手の込んだ絵の一つの根源がうかがえるもので、ジョージアナの記憶によると、猫が描き込まれた唯一の彼の本格的な絵画だという。その猫は大きな「ヴィーナス礼賛」の絵画に再び描き込まれることはなかった。だからその猫は恐らく、少し前に急死した友だちのように思っていた彼の猫の「トム」を記念するために描き込まれたのであろう。バーン＝ジョーンズが多様な機会に深く研究し、ついに見ないでも描けるようになった特別な花ばな－例えば百合や向日葵、薔薇－の絵も描いた。彼はレッド・ライオン・スクウェアの庭で百合を描いたが、練習を終えてから10年後にケンジントン・スクウェアの自分の庭にある花の群生



図7 「チャイルド・ローランド」1861年。ペンとインク、グレイの淡彩。43×24cm。セシル・ヒギンズ美術館，ベッドフォード。

の見事な鉛筆画を描き多くの人たちの親しむものとなった。当時も薔薇の花は無批判に愛でたが—まだ取り組む時期が来ていなくて—日向葵についてはすでに遥かによく知っていたようで、望みなき騎士道的探究を表わした「チャイルド・ローランド」の下絵の背景の一面に描いた(図7)。チャイルド・ローランドはスコットランドの古謡中にでてくるアーサー王の子であり、妖精の城に幽閉された姉の「麗しのバード・エレン」を救出す人物である。彼はラファエル前派に人気があったロバート・ブウラウニング著『男と女』(1855)

の「チャイルド・ローランド暗き塔に来たれり」という詩に英雄として出てくるのだが、バーン＝ジョーンズはブラウニングのすべてのなかでこの詩が「とりわけ深遠で強烈」⁽¹⁵⁾と見なした。そしてその詩はラスキンやロセッティ、バーン＝ジョーンズが教えていた労働者大学で学生たちに「その詩が最初は全部理解できなくても、彼らには有益だ」という理由で読んで聴かされたという⁽¹⁶⁾。その詩の最後の行は騎士が不思議な暗い塔に到着して角笛を吹き鳴らして知らせる場面になっている。バーン＝ジョーンズの絵にある黒ずんだ騎士の甲冑がその陰鬱な雰囲気と合致しているが、バーン＝ジョーンズの絵ではレッド・ハウスで見馴れた沢山の奔放な日向葵の花を沢山描き込むことで暗さが驚異的に和らげられている。後にバーン＝ジョーンズは日向葵について「人を見つめているようでもあり、恥ずかしさを手(葉)で隠しているようでもある。そしてその裏側ときたら、いくら描いても飽きないもので、その根から花びらの先まで知っていてもそれらに興味を失うことは決してない。全体的に日向葵はあたかも物思いに耽っているようだ」と述べた⁽¹⁷⁾。しかし彼は当時の美術の常連たちの間で日向葵を愛でるのが流行になっていたことに嫌悪を感じ、そうした日向葵の崇拝者たちに対して「私は彼らを拒否し、公然と非難をしたいし…その弱体化の愚行のゴッドファーザー(名付け親)には決してならない。彼らが楽しく平和に生き延びることは許せない」とも言った⁽¹⁸⁾。雛げしも彼を惹きつけた。ボドリー氏はある日、レッド・ハウスに朝食に来てバーン＝ジョーンズが朝早くスケッチした美しい雛げしの素描があったのを忘れられなかったという。

バーン＝ジョーンズ夫妻は土曜の午後からレッド・ハウスに頻繁に行き、月曜の朝までいて、毎日レッド・ライオン・スクウェア8番地に仕事に通っていたモリスと一緒に市中に戻るという素晴らしい習慣を続けた。そしてこの場所が商会の業務と友好の新しい中心になり、ここで彼らは未来の計画をたてたり、進行中の仕事について話し合

ったり、その合間には逸話を話したり、まるで若さが決して途切れないかのようにかつての時のような悪戯もした。人の名前を忘れ易いマドックス・ブラウンが二階に何かを持ってきてもらいたいことで、名前を間違えないようにモリスに名前を聞いたが、モリスは「ボタン」と答えたのに、マドックス・ブラウンは階段の先まで行かない内に大きな声で「ペニーさん、済みませんが、……」と言う低めのはっきりした声が聞えて、肝心な二の句は拍手かっさいでかき消されてしまった。

モリスが用事で二、三分間、会議の席をはずしたさいには、フォークナーが『ロンドン住所氏名録』と二脚の大きな銅製の燭台を半開きの扉の上に載せた。モリスが戻ると、これら全部が彼の頭に落ちてきて、彼は怒りの叫びを発して、本気で怒ったぞ！ という身振を見せたが、フォークナーがモリスを不名誉な格好になるように持ち上げて「この子はなんて怒りっぽいのだろう」と大きな声で彼をなじったので、「この怒りっぽい」という言葉が彼の怒りの流れをすべて変えてしまい、モリスはフォークナーをしばらく見ていたが、突然に笑い出してけりがついたという話が残っている⁽¹⁹⁾。

注

1. "Memorials of Burne-Jones," Burne-Jones, Giorgiana. Lund Humphries, 1933. vol.1p. 207.
2. Giorgiana, op. cit., p. 208.
3. "William Morris: His Life, Work and Friends," Henderson, Philip, Penguin Books. 1967.
4. Ibid.
5. Henderson, op. cit., pp. 80- 82.
6. "The Journal of William Morris Society," vol. 4 (Summer 1981), 'William Morris's early Furniture,' p. 26.
7. Ibid.
8. Jan van Eyck (1390-1441)は個性ある肖像を敬虔な態度で「自分の出来る限り」という標

語を書いたという。

9. Giorgiana, op. cit., p. 211.
10. Henderson, op. cit., p. 85.
11. Henderson, op. cit., p. 86.
12. Giorgiana, op. cit., p. 214.
13. Henderson, op. cit., p. 90.
14. Giorgiana, op. cit., p. 224.
15. Giorgiana, op. cit., p. 153.
16. "Letters", Rossetti, vol. 1, 1965. p. 286.
17. "Time Remmebered" Horner, Frances. Heinemann, London. p. 119.
18. Ibid.
19. Giorgiana, op. cit., p. 226.